

## 【実践報告】

# 教職実践演習（小）の概要と課題Ⅳ

広島文教女子大学人間科学部

教授 今崎 浩	教授 岡 利道	准教授 佐伯 育郎
教授 笹原 豊造	准教授 白石 崇人	教授 杉山 浩之
教授 高橋 泰道	教授 村上 典章	

本年度は、「教職実践演習」が開講されて4年目の年であった。教員養成の最終段階として実践的能力の養成の仕上げの位置づけとなる本科目では、①15回の通常の授業と、②課題（指導案やレポートなど）の学修、学校を中心としたボランティア活動、各地の学校教育研究会への参加などの自主学習（15回分、24時間）の二本柱で展開してきた。①においては、アクティブラーニング、保護者対応、学習評価、総合的な学習など教育改革に応じた新しい内容を加味してシラバスの改善を図った。②に関しては、従来通り、教員側が積極的に情報提供を行った。それでは、以下、実際の授業の概要と課題をここに報告する。（授業運営責任者：杉山）

## 第1回「オリエンテーション」

本科目の趣旨と授業全体の進め方を説明した。学生たちは、履修カルテを見直し、自分の課題を考えたことがレポートから伺える。例えば「教育実習ではすべての教科の授業ができたわけではなかった。授業の実践力を先ず向上させたい」「特別活動や生徒指導に関しての実践力に不安がある。しっかり学びたい」「学習指導要領が改訂される。アクティブラーニングについて基本的なことを学びたい」「最近の保護者は以前と変わってきており、モンスターペアレントという言葉もある。保護者対応をしっかりと学びたい」「道徳が教科化される。道徳教育は教育活動全体で行われるものだが、新しい考え方を学びたい」「学校ボランティアや研究会に参加して最新の動向を知りたい」など、シラバスを見て、学習意欲が高まっていることが伺える。こうした学生のニーズ・課題に応えうる授業を展開しなくてはならない。（担当：杉山）

## 第2・3回「特別支援教育の今日的課題」

昨年と同じように、講師として古田寿子先生を招き、講演テーマ「特別支援教育の今日的課題」のもと、2回にわたり、発達障害をもつ子どもの教育方法について具体的な内容を学修した。第2回は幼児と低学年児童を中心にした講義。第3回は高学年児童と中学生を中心とする講義であった。内容を要約する。国連採択の「障害者の権利に関する条約」（2006年）が2014年、日本において漸く批准され、インクルーシブ教育が推進されている。中教審答申(2012)「共生社会の形成に向けてインクルーシブ教育構築のための特別支援教育の推進」において「合理的配慮」の定義がなされた。合理的配慮とは、「障害のある子どもが他の子どもと平等に教育を受ける権利を享有・行使することを確保するために、学校の設置者及び学校が必要かつ適切な変更・調整を行うことであり、障害のある子どもに対し、その状況に応じて学校教育を受ける場合に個別に必要とされるものであり、学校の設置者及び学校に対して体制面、財政面において均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」とした。合理的配慮の決定は「一人ひとりの障害の状態や教育的ニーズ等に応じて決定されるもので、興味・関心、学習上または生活上の困難、健康状態等の実態把握を行い、可能な限り合意形成を図った上で」行われる。例えば、自閉症の子どもの場合、視覚情報の指示、タイムスケジュールの活用、得意な活動保障、個別的受容的関わり、カムダウルームの確保などがある。行動の予見可能性と安全配慮義務、自傷行為誘発防止義務と自傷行為防止義務等の視点から様々な裁判事例も紹介された。学習障害の子どもに他の子どもと同じテキストで反復指導する「教育虐待的行為」、不安の強い子どもに「目を見て話す・視線を無理に合わせる・

大きな声で話をするなどを強いる「一種の教育虐待」は禁止事項である。自閉症スペクトラムの子どもに対応する原則は、「具体的・肯定的・視覚的」手段で見通しが持てる指導が欠かせない。活動と場所を一致させたり活動場所の境界をはっきりさせたりする「場面整理」、興味のあることを大切にするなどである。氷山モデルの考え方が重要で、パニック・自傷・攻撃・破壊などの水面下には理解・伝達不足や感覚の特異性などがある。この水面下へ対応・支援が合理的配慮に繋がるものである。

(担当：杉山)

#### 第4回「広島文教女子大学教育学会第31回研究発表大会への参加」

同学会の内容は二部構成となっている。Ⅰ部は「分科会」として、児童教育関係分科会、幼児教育関係分科会が設けられ、今年度の発表は次のとおりであった。

##### 【児童教育】

- ・野地香苗先生（24期生）「CHALLENGE ～自立・自律を目指して～」
- ・北浦成美先生（27期生）「自分の考えをもち かかわり合い 仲間とともに 学び続けようとする子どもを育てる社会科授業 - 『練り合い』という『協働』、共有できる『解』の『創造』 - 」

##### 【幼児教育】

- ・蓑毛春香先生（30期生）「熊本地震で経験したこと」
- ・野地民江先生（広島文教女子大学附属幼稚園主任）「今、想うこと。」

学生のレポートからは、発表者による学級経営の取組、授業づくりの工夫、体験談について感銘を受けたという記述が見られた。卒業後、教壇に立った時に参考にして是非実践したいという内容が多かった。発表者はいずれも「学び続ける教員像」であり、学生に刺激を与える存在、学生の目指すべきモデルとなっていることがうかがえた。

Ⅱ部では、本学教授・吉田裕午先生から「セレンディップなノコシフミ」という演題で講演をいただいた。「セレンディップ」＝「幸せな出会い」、「ノコシフミ」＝「残すメッセージ」の意味であった。クイズ等も交えながら、先生の生い立ち、本学でのご実践、卒業生や退職された先生方についてのお話もいただいた。学生のレポートからは、残りの学生生活を有意義に過ごすとともに、これから出会う子どもたちのためにできることは何かを考える機会になったという記述も見られた。

(担当：佐伯)

#### 第5回「教育政策と今後の改革の方向性」

概要を簡潔に講義した後、実践力を高めるために、「教科を横断する学習活動の提案」（カリキュラム・マネージメントの一例）を作成する演習授業とした。その成果の一部を紹介する。

	テーマ	キーワード	ポイント
1	食育	地域連携・活性化	農業＋伝統文化の交流時間を十分に。
2	環境保護教育	水質調査、リサイクル、リユース	家庭排水や農業による環境汚染の認識。
3	防災教育	避難生活の体験	被災者との出会い・災害の原因分析・対策と訓練。
4	自然探索・保護活動	遊び道具や場所作り	専門家の活用、自然の中でしか経験出来ない「状況判断力」
5	キャリア教育	地域で働く人、職場体験	多様な生き方を知り、人生を考える。
6	平和学習	アオギリ、被曝	他国に与えた被害も見る「中立性」を認識する。

カリキュラムは、地域の人材・資源を生かしてチーム学校としてマネッジしていくことが重要である。地域の専門家を招いたり伝統技能を持つ高齢者と交流したりして、地域を活性化する。生死にかかわる多様で貴重な体験談を生々の声で聴き、リアルな学習を蓄積する。そうした学習こそが「社会に開かれた教育課程」というものである。今後も加速度的な社会の変化が予想される中、アンテナを張り、PDCAのサイクルで教材開発と授業研究を進めていく発想をもつ専門職教師の養成教育が益々必要で

ある。

(担当：杉山)

#### 第6回「アクティブラーニング～図工科を例にして～」

1. じっくりみよう！ みんなで考えよう！ 本授業では、まず6人程度の小集団に分かれてグループワークを行い、作品についてグループで考え、話し合っ、気付きを記述した。

2. みんなで発表・交流をしよう！ その後、グループ別の発表を通して、感じたこと、考えたことを交流した。代表者が1人ずつ出て、スクリーンに提示した作品を示しながら、グループで話し合った内容を発表し、交流した。

3. アクティブラーニングって何？ 次に、アクティブラーニングの定義について確認した。文部科学省による記述や研究者の見解を提示し、再確認した。

4. アクティブラーニングの方法と効果 アクティブラーニング型学習の一例を示し、アクティブラーニングの効果について再確認した。

5. 作品の裏側をのぞいてみよう！ 1・2で行った鑑賞で取り上げた2つの作品についてのデータを明らかにした。作者のプロフィール、作品に使われた素材、作品の題名、作品が生まれた背景などについて紹介した。

おわりに 最後に、担当者からメッセージを伝え、本授業を5段階で評価してもらった。その結果、Very goodが24%、Goodが53%、Usualが7%、Badが5%、Very badが4%、不明が7%という結果となった。反省点を次年度に生かし、内容を充実させていきたいと考える。

(担当：佐伯)

#### 第7回「保護者・地域対応に関するロールプレイング」

本時のねらいは、保護者や地域住民からの多様な意見、要望や苦情に対応する際の基本的な考え方や内容を理解し、具体的事例について意見交換しながら実践力を高めることであった。そこで、まず適切な対応として、「①事実を基に対応する。②誠意をもって対応する。③法的な根拠を踏まえて対応する。④組織的に対応する。」という基本的な考え方を説明した。次に、保護者や地域住民をいくつかのタイプに分け、タイプに応じた対応のポイントを示した。さらに、対応の基本的な流れとして、初期対応、報告、その後の対応という順で説明した。そして最後に、演習として、保護者懇談会での保護者の要望に対する対応のロールプレイングを行った。また、講義後に多様なケースを想定して保護者や地域住民の要望に対する指導構想案作成を課題とした。事後課題の評価によって、学生が基本的な対応について、ほぼ理解していることがわかった。また、ロールプレイングによって、保護者の気持ちが共感的に理解できたと述べた学生が多かった。しかし、お互いのやりとりの中で、即時に適切な対応をすることを課題として挙げた学生が多かった。これは、日常的に対立を避ける行動をとる傾向が強い学生にとって、対立がある場合も含めて多様な考えの相手に適切に対応する力がついていないことが要因と考えられる。次年度は、このようなロールプレイングの機会をさらに増やしていく必要があると考える。

(担当：村上)

#### 第8回「道徳の事例研究」

本時のねらいは、現代的課題（情報モラル・いじめ問題）に関わる事例に基づき、道徳教育についてグループで考えることとした。

小学校の道徳教育は、この数年で激動の時代を迎える。平成27年3月、小学校学習指導要領一部改訂によって「特別の教科道徳」が設置された。また、平成28年7月には、文部科学省の協力者会議である道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議が、「「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について」を報告した。さらに、平成28年11月には、いじめ防止対策協議会が「いじめ防止対策推進法の施行状況に関する議論のとりまとめ」を報告した。それに加えて、今年度中には新しい学習指導要領が告示される予定である。当日は、この流れについて簡単に確認した後、授業を始めた。次に、学校の道徳的問題に関する事例を提示し、自分の考えをまとめてからグループ討議に入った。討議の結果は、グループごとに発表し、クラス内で共有した。考察・討議は、個別指導と全体指導や、保護者との連携、全体計画などの具体に関わる問題に沿って行った。

(担当：白石)

## 第9回「外国語活動・英語科の模擬授業」

以下の項目について確認した。学生には各項目の要点を簡潔にまとめ、提出させた。

1. 「これまでの動向」として、『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』の意図するもの、小学校学習指導要領「外国語活動」の主旨、英語の教科化に関わる諸問題を確認した。特に、2020年より小学校3・4年生で週1コマを外国語活動として、小学校5・6年生には週2コマを正規の教科として実施されることの影響について確認した。

2. 小学校で英語を指導する際に必要なスキルの一部について確認をした。

(1) 「担任の役割」として、「英語ができる」だけでは不十分であり、小学生に「説明をし、理解させる」力が求められる。学ぶ立場から教える立場へと成長する必要がある。

(2) 「ALTとの関わり」として、ALTと協力して授業を構築するための基礎的なコミュニケーション能力を身に付ける必要がある。現場に出てからも継続して努力する必要がある。

(3) 「Classroom English」として、授業で用いられる基本的な表現を練習した。

(4) 「English Songs」として、授業で用いられる代表的なEnglish Songsを紹介した。

3. 「今後の課題」として、学生に自らの課題を挙げさせた。多くの学生は「英語で授業を行うことに不安を感じている。また、ALTとのteam teachingに自信がない」ことを課題として挙げている。

(担当：笹原)

## 第10回「国語・算数科の模擬授業」

算数科の授業づくりでは、算数科の授業の1時間目、いわゆる授業開きをどのように行うかについて演習・協議を行った。具体的には、めざす算数科の授業像の提示、教科書の活用、ノート指導、家庭学習の進め方を取り上げた。

めざす算数科の授業像の提示については、担当教員による模擬授業体験を行い、実際に授業を行うことを通して、児童に具体的なイメージを持たせることが重要であることの理解を図った。

教科書の活用については、どのような教科書を活用方法があるかを協議し、学習意欲の喚起、学習課題の提示、学習方法の提示、学習の個性化・個別化、学習の定着といった活用方法が考えられ、効果的に使っていくことが必要であると整理した。

ノート指導については、まずは教師が目指すノートの具体を示すこと、継続的に評価を行っていくことについて、具体物を示しながら説明を行い、指導資料の作成を行った。

家庭学習の進め方については、家庭学習の出し方について協議し、家庭学習の目的に沿って、方法を検討することが重要であると整理した。

授業後のコメントには「教師がめざす姿（目標）を持ち、それに沿った方法を考えていくことが重要である。」といったものが多く見られた。

(担当：今崎)

テーマは、「確かな評価を見据えた国語科授業づくり」であった。事前に「大分県教育庁チャンネル」で、「6年国語・春はあけぼの」の授業を視聴してもらった。当日は、テキスト（冊子）をもとに、授業の学習指導案、「春はあけぼの」の教材文、板書計画図、授業記録（プロトコル）等を確認ののち、確かな評価について検討を進めた。事後レポートとしては、「担当教諭はこの授業で何をどのように評価しようとしていたか」についてまとめ、提出してもらった。

(担当：岡)

## 第11回「学習評価」

学習評価については、評価の機能、評価規準・評価方法等の設定の仕方について、これまでの学修内容を確認した後、実際の算数科の問題に対する児童の記述をどのように評価するかグループ協議を行った。同じ児童の記述であっても、グループごとの評価が異なったことから、評価基準（判断基準）を具体的に設定しておくことが必要であるという共通理解が得られた。また、評価を児童の指導に生かすこと、授業者自身の指導の改善に生かすことの重要性を再認識した。

さらに、観点別評価の総括、指導要録の記述の仕方の「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（国立教育政策研究所、2011）に示された事例の紹介をした。

事後学修では、算数科の授業の終末で使用する評価問題の作成に取り組んだ。このことを通して、目標に準拠した評価を行うにあたっては、適切な評価規準を設定することは言うまでもなく、評価問題の文章や数値、問題数、指示事項等、評価問題の作成にあたっての留意事項を理解することができた。

授業後のコメントには「授業を構想する際に、ややもすれば学習活動をどうするかに目が向きがちであったが、本時の目標の重要であることを再認識した。」といったものが多く見られた。

(担当：今崎)

## 第12回「総合的な学習～事例研究～」

総合的な学習の時間の全体計画と単元構想の立て方を中心に授業を行った。

学生は、大学の授業において、総合的な学習の時間については十分に学修しておらず、教員採用試験に向けて学んだ程度である。また、小学校の教育実習においても、教科が中心で、総合的な学習の時間については、実際に授業を行っていない現状である。

そこで、授業では、自分が小学校・中学校時代に、どのような総合的な学習を行ったのかについて想起させ、総合的な学習の時間の目的、内容について確認した。その後、年間指導計画の単元配列や、単元計画における探究的な学習（問題解決的な活動が、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動）について講義した。また、課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力等の育成に資する探究的な学習過程において思考ツールを活用することについて、事例を基に紹介した。そして、総合的な学習のどの場面にどのような思考ツールが使えるのか、実際に演習において考え、その目的や子どもの考えを予想した。

今後の課題としては、前述の通り大学の授業で総合的な学習の時間について概要を学び、教育実習等で実践的に取り組んでいく必要があると考える。

(担当：高橋)

## 第13回「ICT機器の教科指導への活用」

ICT教育の現状と課題について授業を行った。まず、ICT機器活用の良さと問題点、グループごとに話し合い、ipadを使用し、意見をまとめ、発表を行った。その中で、今求められている情報活用能力の必要性、有効性、教師のICT活用指導力の育成について、実践事例を通して講義を行った。また、全国の学校のICT機器の活用状況についても確認した。最後に実際にどんなICT機器を使い、授業を展開するのか、指導案の作成も行った。

今後の課題としては、ipadを4年間活用しているが、ICT教育に関する学修について経験がない、あるいは少ない実態が挙げられる。今後は本授業までに、実際にICT機器を活用する活動を増やすとともに、学生自身が関係する研究会や研修会等に参加して、基礎的な面を学んでおく必要があると感じた。

(担当：高橋)

## 第14回「研究会と学校支援ボランティア活動の報告と学びあい」

本時のねらいは、履修生がすでに行ってきた研究会や学校支援ボランティア活動について、クラス内で報告し、そこで得たことを学び合うこととした。

当日は、まず教職実践演習のねらいである4つの事項を確認し、そのために研究会や学校支援ボランティアが役立つことについて確認した。そして、出席者を4～5名ずつグループに分け、グループ単位での情報交換と討議を行った。グループは7～8グループできた。グループ討議は、活動から得たことを、子ども理解や子どもとのかかわり、教科等の指導、学習・生活環境、生活指導、学級経営などについて、エピソードに沿ってまとめる形で進めた。その際に、教育や子どもに対する使命感や責任感にどうつながったか考えるように指示した。グループ討議後、グループごとに約5～6分で発表・質疑応答し、クラス内で学びを共有した。

発表では、様々な事例が報告された。なかでも、子どもの家庭環境に注目する必要性を主張するグループが多かった。子どもの貧困や家庭の教育力低下、家庭環境の多様化などが進む現代日本において、重要な気づきであったと思われる。なお、質疑応答では、学生の質問で進めるつもりで計画していたが、学生からの質問は低調であり、結局ほとんどが授業者の質問になってしまった。質問は理解



を深めるため、重要である。来年度に向けて、質問のできる学生を育てることが課題である。

(担当：白石)

## 第15回「まとめ」

授業担当者一人ひとりから約10分程度、授業を振り返り、ポイントとなることが述べられた。その後、学生は授業の振り返りとコメントに対して、学修のまとめを記録した。その一部を紹介する。

- ・「先生は脇役という言葉。・・・これからは自分が子どもたちの下から持ち上げて輝かせられるように頑張ります。」
- ・「保護者との対応をロールプレイで体験するということを行いました。子どもの多様化の背景には親の多様化があること、親と教師は対立する立場だとしても、話し合いの中で折り合いをつけていくこと、中心には子どもがいること、人と人のかかわりの大切さなど教師としての立場だけでなく、これから自分が親になることや社会人になることを当てはめられる、私にとって為になるお話しでした。人として魅力的な教師に成長したいと思いました。最後の講義ですべての講義の振り返りができました。忘れていたことも思い出すことができました。」
- ・「学習支援ボランティアでは様々な子どもと出会いました。一人ひとりに応じた教え方がいかに重要であるかを実感しました。」
- ・「この授業を通して教員としての自覚を持つことができるようになり、それに伴って責任の重さを感じるようになりました。ボランティアなどを通して改めて教える指導することの大変さを感じることができ、裏で先生がどのようなことをしなければならぬのかを考えることができました。自分が4月からどんな気持ち姿で教壇に立つべきか、どのようなクラスを作っていきたいか、ゆっくり考えていきたいと思います。」
- ・「学生生活最後の必修科目で実際に現場で使えることを学べた。アクティブラーニングについて仲間と一緒に学べたことが良かった。学校ボランティアに行くことができて4月からの心構えが少しできた気がした。先生方からも学校現場のことを詳しく教えていただいたので良い経験になった。研究授業も算数でとても良い授業を見ることができた。現場で生かしていきたい。」
- ・「14回分の授業と今回のまとめで、これから自分が本当に教師になるんだということを改めて考えさせられました。授業が少なくなり、意識が低くなって来ている気がしていたので、しっかり気を引き締めることができたと思います。」
- ・「今までにもっとしっかり将来を見据えながら授業を受ければ良かったと後悔していますが、4月までの間に自分が出来る事を精一杯やっついこうと思います。」

以上のように、学生たちは本授業を振り返りつつ新たな目標を持ち、4月に向けての心構えを作ろうと努力していることが見える。本授業は、これで4年目を終了した。昨年度上げていた「授業に関するアンケート調査」とシラバス改善システム作りに関しては今後の継続課題としてあげておきたい。

(授業運営責任者：杉山)